



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アラビア語シャーム方言における接辞の意味機能変化についての考察：フスハーとの比較分析を通じて
Author(s)	アリ, ネスリン
Citation	研究論集, 25, 209 (左) -236 (左)
Issue Date	2026-01-16
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.25.l209
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98773
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_rjgshhs_25_p209-236_l.pdf



アラビア語シャーム方言における接辞の 意味機能変化についての考察

— フスハーとの比較分析を通じて —

アリ ネスリン

要 旨

本研究は、シャーム方言における動詞接辞 ʕam- , b- , およびゼロ形 (ʔO- , nO- , yO- , tO-^1) の意味的・機能的変化を、Langacker (1977) および Eckardt (2006) の再分析理論に基づき検討した。フスハーでは接辞 (ʔa- , na- , ya- , ta-) が直接法・接続法の双方に用いられ、識別は語末母音に依存する一方、シャーム方言では語尾母音が脱落し、ムードの識別が接辞の有無に委ねられることが知られている (榮谷 1995, 仁一 2009, Cowell 1964)。さらに、 ʕam- は進行形や反復的行為, b- は未来・習慣・可能性などを標示するが、従来研究では語用論的側面の検討が十分でなかった。本研究では、(1) b- 形とゼロ形の機能的対立, (2) ʕam- の語用論的機能, (3) 複合形 $\text{ʕam-} + \text{b-}$ の再解釈, (4) 等位構文におけるゼロ形のテンス・アスペクト継承を分析対象とした。談話データに基づく分析により、ゼロ形は等位構文で先行動詞のテンス・アスペクトを受け継ぎ、形式的には無標でも文法的意味を帯びることが確認された。また、 ʕam- と b- はテンス・アスペクト標示を超え、話者の感情・評価・丁寧さを表す語用論的意味を伴うことが明らかとなった。複合形では b- が人称標示として再解釈され、 ʕam- が談話的・エモーショナルマーカースとして機能することも観察された。これらの結果は、接辞の再解釈と機能転換を通じた形態素の再構成と談話機能の変容を示し、方言文法の記述とともに、言語変化における談話的要因の重要性を浮き彫りにする。

キーワード：アラビア語, 方言学, 形態論, 接辞, 意味再分析

¹ 接頭辞 (ʔO- , nO- , yO- , tO-) の「○」は、フスハーにおいては一貫して/a/ (舌を口の底に下げ、口を大きく開いて発音) に実現されるのに対し、シャーム方言では語頭の曖昧母音/a/ (舌の位置が中立的で、口をあまり開かず、力を抜いて発音) に変化する傾向があるため、母音の中立的記述として「○」で表記する。

1. はじめに

現代アラビア語の諸変種の中でも、シャーム方言（主にシリア・レバノン地域で話される口語アラビア語）は、テンスやアスペクト、ムードといった文法カテゴリをどのように表現するかという点で、標準アラビア語（フスハー MSA）と大きく異なる特徴を示している。特に、語頭に現れる接辞（ $\text{\textcircled{f}am-}$, b- ）や接辞の欠落（ゼロ形 $\text{\textcircled{0-}}$ ）が、文法的な意味だけでなく、話者の意図や文脈に応じて柔軟に機能を変化させるという現象は、言語変化および文法化の観点から極めて興味深い。

本研究の目的は、シャーム方言における動詞接辞の機能的変化および談話的再解釈のプロセスを明らかにすることにある。とりわけ、接辞 $\text{\textcircled{f}am-}$ および b- に注目し、これらが単なるテンス・アスペクト標示形式としてだけでなく、語用論的・談話的な機能へと拡張されている実態を明らかにする。たとえば、 b- が時制表示を超えて「可能性」や「丁寧さ」のニュアンスを持つようになったり、 $\text{\textcircled{f}am-}$ が強調や感情的関与のマーカーとして再解釈されるようなケースである。また、これらの接辞とは対照的に、接辞を持たないいわゆるゼロ形（ $\text{\textcircled{0-}}$ ）も、従来の叙想法的（subjunctive）用法を超えて、テンス・アスペクトの共有を担う談話構造的要素として再機能化されている可能性がある。たとえば、 $\text{\textcircled{f}am-}$ を伴う動詞と同一文中でゼロ形が共起する場合、ゼロ形にも同じ時間的解釈が波及する現象が観察される。こうした用法は、接辞の表出がないにもかかわらず、文全体の文法的一貫性を保つために語用的に補完されていると捉えられる。

本研究ではこのような現象を、「再分析（reanalysis）」の枠組みに基づいて検討する。すなわち、言語形式の形態は変わらないまま、その機能が再解釈・再分節・再定式化されるプロセスとして理解するものである。

以上の背景を踏まえ、本稿では、シャーム方言における動詞接辞とゼロ形の機能的変化を、以下の4つの観点から論じる。

- A. b- の潜在的意味（モダリティ）への再定式化
- B. ゼロ形が等位接続構文中で時制・アスペクト情報を継承する構文的機能
- C. $\text{\textcircled{f}am-}$ （ $\text{\textcircled{f}amma-}$ ）の強調標識への転用
- D. $\text{\textcircled{f}am-} + \text{b-}$ 複合形式における再分節と機能分化

これらの観点から、口語アラビア語における文法化と語用論的再解釈の具体的なプロセスを明らかにし、現代シャーム方言の動詞体系の変遷を理論的に位置づけることを目指す。

2. ダイグロシアとアラビア語変種について

アラビア語は世界で最も話されている言語のうちの一つであり、書き言葉と話し言葉が大きく異なるダイグロシア（二重言語）の例である。ダイグロシア（diglossia）とは、ファーガソン Ferguson（1959）によって提唱された社会言語学の用語で、日本語では「二言語変種使い分け」などと翻訳される。これは、2つの言語が一つの社会の中で共存し、それぞれの言語が特定の場面や状況で使い分けられている状況を示す。すなわち、2つの言語が互いに競合したり干渉したりせず、場面や状況によって使い分けの基準が明確に存在していることである。使い分けられる2つの言語には名前があり、片方をH変種（高変種, High Variety）、もう片方をL変種（低変種, Low Variety）と呼ばれる。H変種は社会的地位が高く、教育、報道、宗教などで用いられる言語変種であり、H変種は公式な場面や書き言葉として用いられることが多い。一方、L変種は社会的地位が低く、家族や友人との日常会話で使われる口語であり、書き言葉がない場合も多く、家族や友人との会話を通じて自然に習得されるのが特徴である。以下の図1のようになる。

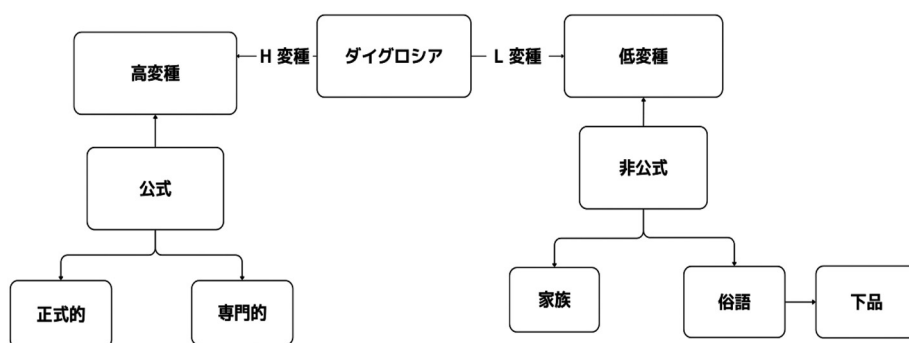


図1 二言語変種

Ferguson（1959）は、「ダイグロシア（diglossia）」の概念を通じて、一つの言語共同体において異なる社会的機能を果たす二つの言語変種、すなわち高位変種（High variety: H）と低位変種（Low variety: L）が併存する現象を明確に提示した。彼によれば、HとLは使用される状況によって厳密に使い分けられており、両者の重なりは最小限にとどまる（Ferguson, 1959: 328-329）。たとえば、Hは公式スピーチや新聞記事、宗教的儀礼といった形式的場面に適しており、Lは日常会話や市場でのやりとりなど、非公式な場面で主に用いられる。Fergusonは、流暢なLを話す外部者が正式な場でそれを用いた場合、またはL話者が非公式な場面でHを用いた場合には、聴衆から違和感や嘲笑を受ける可能性がある」と指摘している。例えば、新聞をHで音読し、内容をLで議論するという行為や、Hによる公式スピーチの後にLで質疑応答を行うと

いう慣習は、多くのダイグロシア社会において一般的な言語行動である。

Ferguson (1959: 333-335) は、H と L の違いが単なる使用域の違いにとどまらず、文法 (grammar)、語彙 (lexicon)、音韻 (phonology) といった言語構造の各層においても体系的に区別されることを明らかにしている。

文法的側面では、H には L に存在しない格変化や動詞活用体系が存在し、L ではこれらの機能が簡略化、あるいは完全に消失している。たとえば、古典アラビア語には名詞の三格 (主格・対格・属格) が存在するが、シャーム方言などの口語ではこの区別はほぼ失われている。

語彙の違いとしては、H には専門的・抽象的な語彙が多く含まれるのに対し、L は日常生活や地域文化に根差した語彙を多く持つ。両変種間では、同義であっても語彙形が異なるペア語が存在し、たとえば「見る」という意味では H の raʔā に対し、L では jāf が用いられる。これにより、話し手がどの変種を用いているかが直ちに識別可能となる。

音韻面では、H と L の体系は互いに類似している場合もあるが、発音における音の置換や簡略化が顕著である。たとえば、H の /θ/ 音は、シリアやエジプトの方言において /s/ に置き換えられることが一般的である。

本研究では、こうしたダイグロシアの状況の下で、H に該当するフスハーと L に該当するシャーム方言における動詞接辞 (特に接頭辞) の機能的変化に注目する。とりわけ、接辞の文法的役割の差異や意味的拡張のあり方に焦点をあて、再分析理論の枠組みに基づき、その言語変化のメカニズムを考察する。本稿では、フスハーとの比較を踏まえつつ、以降はシャーム方言に焦点をあて、その動詞接辞の機能的変化と談話的再解釈を詳細に分析する。

なお、本文中の転写は、アラビア語フスハーの IPA 転写を参考にした。アルファベットに以下の文字を用いる²。

ʔ, b, t, θ, dʒ, h, x, d, ð, r, z, s, ʃ, sʕ, dʕ, f, ðʕ, ʕ, ɣ, f, q, k, l, m, n, h, w, y

この点において、シャーム方言は、アラム語と同様に /ð/、/θ/、/ðʕ/ の 3 つの歯音音素は存在せず、代替音によって置き換えられる傾向がある。一方、現代標準アラビア語 (MSA) には存在しない音素として /p/、/g/、/v/、/ç/ の 4 音が確認されることがあり、これらは地域における民族言語 (クルド語、アルメニア語、トルクメン語など) や、歴史的に接触のあった言語 (トルコ語、ペルシア語など) からの借用語彙に由来すると考えられる。母音については、短母音

² アラビア語の文字はアラム文字にその起源を持ち、アブジャドという独特な文字体系に属している。右から左へと書かれ、文字が続け書きされるのが一般的で、主に子音を表す文字で構成されている。短母音は通常、文字で直接表記されず、「シャクル (shape/form)」と呼ばれる補助記号によって表される。アラビア語には 3 つの短母音 (a, u, i) と長母音 (a:, u:, i:) があり、それぞれアリフ (ア行)、ワーウ (ワ行)、ヤー (ヤ行) の文字が使用される。

標準アラビア語の子音音素

	唇音	強調なし		強調音 ¹		硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	咽頭音 ²	声門音
		歯音	歯茎音	歯音	歯茎音					
鼻音	م m		ن n							
閉鎖音	無声音		ت t		ط t ^ʕ		ك k	ق q		ء ʔ
	有声音	ب b	د d		ض d ^ʕ	ج dʒ ³				
摩擦音	無声音	ف f	ث θ	س s		ص s ^ʕ	ش ʃ	خ x ~ ʁ ⁴	ح ḥ	ه h
	有声音		ذ ḏ	ز z	ظ ṭ ^ʕ			غ ğ ~ ʁ ⁴	ع ʕ	
ふるえ音				ر r						
接近音				ل l ~ l ^{ʕ5}		ي j	و w			

として a, i, u, e, o, および中性母音(ə)を用い、それぞれの長母音を ā, ī, ū, ē, ō によって表記する (Cowell, 1964: 9 に準拠)。

なお、例文の語釈などで用いる略号は次の通りである。

IND : indicative mood (直接法, 指示法) SUBJ : subjunctive mood (接続法, 仮定法)

PERF : perfective (完結相) IMPF : imperfective (非完結相)

AP : active participle (能動分詞) IMPR : imperative (命令形) FUT : future (未来)

DEF : definite article (定冠詞) SG : singular (単数) PL : plural (複数) M : male (男性)

F : female (女性) 1, 2, 3 : personal pronouns (人称) NEG : negative (否定)

Q : question particle (疑問辞) INF : infinitive (原形定詞)

3. シャーム方言におけるアラム語からの影響と形態的特徴

シャーム方言は、レバント地域におけるアラブ化の過程で形成された口語アラビア語であり、7世紀以前にこの地域で話されていたアラム語やシリア語と、後に導入されたアラビア語フスハーとの接触と融合の結果として成立した。この過程により、シャーム方言にはアラム語由来の言語的特徴が多く残されており、それらは主に語彙・音声・文法の3つの側面に分類される。まず語彙においては、日常生活に根ざした多様な語彙がアラム語に由来しており、フスハーとは異なる独自の表現が多く見られる。これらは地域の文化的・歴史的背景および他言語との接触に起因する。例えば, barā (外), dʒwwā (内), zalamē (男の人／強い), mayy (水), mnīh (良

い) のような言葉はアラム語とシャーム方言の両方に存在するが、アラビア語フスハーには含まれない。

音声面では、特に語末音節に関して特徴的な違いが見られる。アラビア語フスハーでは語末に母音が付加されることが一般的であるのに対し、シャーム方言ではアラム語と同様に語末母音が省略される(例: CaCaCa → CaCaCØ)。たとえば、「書く」という動詞の三人称男性単数形(現在形)を例に挙げると、アラム語では yØ-ktob-Ø、アラビア語フスハーでは ya-ktob-u、シャーム方言では ya-ktob-Ø となる。ここから、フスハーでは語頭・語尾に母音が明確に現れるのに対し、アラム語およびシャーム方言では末尾母音が脱落し、語幹との結合がより簡略化されていることがわかる。このような形式的な類似は、シャーム方言がアラム語の影響を受けていることを示唆している。

文法的観点から見ると、非完結形の動詞は、語根の前に小辞(ʔØ-, nØ-, yØ-, tØ-: ʔnyt ʔnīʔ)を接続することで形成されるという点において、アラム語、アラビア語フスハー、シャーム方言の三者に共通する構造が見られる。しかし、アラム語およびフスハーにおいては、これらの小辞が時制・人称・数・性を包括的に標示する統合的な文法形式として機能しているのに対し、シャーム方言では、それらの小辞は人称・数・性の標示に特化し、時制およびアスペクトの標示機能は著しく弱まっている。この機能的変化の結果として、シャーム方言では、時制・アスペクトの意味を補うために、ʕam- や b- といった語彙的接辞が動詞の前に付加される構文が発達し、それらの接辞が新たに文法的機能を担うようになっている。

4. アラビア語動詞の変化形と本稿で取り扱う言語現象について

上記(2. 節)で言及したファーガソン(Ferguson)のダイグロシア理論に関連して、アラビア語の高変種(H)と低変種(L)との間には、さまざまな言語的側面において顕著な違いが存在する。本稿では、その中でも文法的側面に焦点を当てる。高変種であるアラビア語フスハーにおいては、動詞に付く接辞が主語の人称・性・数を示す文法的機能を担っている。これに対して、低変種にあたるシャーム方言では、これらの接辞の文法的機能、特に一致(アグリーメント)に関する役割が弱まっている。

その結果、シャーム方言では、主にテンスやアスペクトといった文法的機能を担う新たな接辞(例: ʕam-, b-)が発達した。従来の主語に関わる接辞(フスハー: ʔa-, na-, ya-, ta-/ シャーム: ʔə-, nə-, yə-, tə)は引き続き使用されているが、それらは新しい接辞とは明確に役割が分けられており、機能の混同を避ける構造となっていると思われる。

以下の例文は、フスハーとシャーム方言の簡単な比較を示している。例文(1)はフスハーの例であり、例文(2～5)はすべてシャーム方言の例である。

- (1) a. **ta-** **qraʔ-u** **sārā** **al-kitāb-a**
 3.SG.F- read-IND _____ DEF-book-ACC
 「サラーは本を読んでいる。」 (進行中)
- b. **yadzibu ʔan** **ta-** **qraʔ-a** **sārā** **al-kitāb-a**
 have to/ has to 3.SG.F- read-IND _____ DEF-book-ACC
 「サラーは本を読まなければならない。」 (モダリティ)
- (2) a. **sārā** **ʔam- tā- ʔrā-Ø** **əl-ketāb-Ø**
 _____ IND- 3.SG.F -read DEF-book
 「サラーは本を読んでいる。」 (進行中)
- b. **ʔam- b- ʔrā-Ø** **əl-ketāb-Ø**
 IND- IND-1.SG - read DEF-book
 「私は本を読んでいる。」 (進行中)
- (3) a. **sārā** **b- tā- ʔrā-Ø** **əl-ketāb-Ø**
 _____ IND- 3.SG.F -read DEF-book
 「サラーは本を読む。」 (未来の出来事)
- b. **sārā** **b- tā- ʔrā-Ø** **əl-ketāb-Ø**
 _____ IND- 3.SG.F -read DEF-book
 「サラーは本を読まなければならない。」 (モダリティ)
- (4) **sārā** **Ø- tā- ʔrā-Ø** **əl-ketāb-Ø**
 _____ SUBJ- 3.SG.F - read DEF-book
 「サラーは本を読まなければならない。」 (モダリティ)
- (5) a. **ʔam-tā-** **drus-Ø** **ū-** **Ø- tā- fteyel-Ø**
 IND-3SG.F- study and SUBJ- 3SG.F- work
 「彼女は勉強していて、働いている。」 (一時的な状態)

³ アラビア語シャーム方言および他のいくつかの方言（エジプト）に共通して見られる音韻現象の一つとして、無声口蓋垂閉鎖音[q]が、声門閉鎖音[ʔ]として発音される傾向がある。

b. $\text{\textcircled{a}m-t\text{a-}}$ $\text{drus-}\emptyset$ $\bar{u}$ - $\text{\textcircled{a}m- t\text{a-}}$ $\text{\textcircled{f}teyel-}\emptyset$
 IND-3SG.F- study and IND-3SG.F- work

「彼女は勉強していて、働いている。」

(一時的な状態)

まず、例文 (1 a.) に示されるように、フスハーでは、動詞の接辞 ta- が人称・性・数を文法的に標示し、語尾の短母音 $-u$ が直説法 (indicative) を示す形式的なマーカーとして機能している。対照的に、例文 (1 b.) では、文頭に情意的な表現 (modality expression) が付加されるとともに、語尾母音が $-a$ に変化し、接続法 (subjunctive) への移行を示している。

このように、フスハーにおいては、語末の短母音の違いがムードの識別に直結しており、語末形態に依拠した文法体系が構築されている。一方、シャーム方言では、このような語尾中心の文法標識体系が大きく変容している。

例文 (2 a.) では、 $\text{\textcircled{a}m-}$ が進行中の動作を示すアスペクト標識として不可欠な役割を果たしており、 ta- は依然として人称・性・数を標示するものの、テンスやアスペクトには関与しない。さらに、例文 (2 b.) では、 $\text{\textcircled{a}m-}$ に続いて現れる b- は、従来のテンス・アスペクト接辞ではなく、一人称単数を標示する人称接辞として再解釈されていると考えられる。

例文 (3 a.) (3 b.) では、 b- が未来志向の意味や話者の意志・判断を帯びるなど、文脈に応じてテンス標識、あるいはモダリティの接辞として機能していることが確認できる。

また、例文 (4) では、 $\text{\textcircled{a}m-}$ や b- のようなテンス・アスペクト標識が用いられておらず、 ta- のみが現れるが、このような構文では、発話全体が意志、義務、推量といったモダリティ的解釈へと傾斜する傾向が見られる。ここから、 b- とゼロ形 (接辞なし) は、文脈次第ではともにモダリティ的機能を担うことが示唆される。

さらに、例文 (5 a.) では、等位接続詞 $\bar{u}$ - によって「勉強する」と「働く」という 2 つの動作が並列されており、最初の動詞に付された $\text{\textcircled{a}m-}$ が文全体のアスペクト解釈を先導している。2 番目の動詞には接辞が付されていないが、等位構造の中で前項のアスペクトの意味が波及し、ゼロ形が機能的役割を担っていることがわかる。一方、例文 (5 b.) のように、2 つ目の動詞にも再び $\text{\textcircled{a}m-}$ が現れる場合、それはアスペクト表示というよりも、話者の感情的評価や談話的強調を表す語用論のマーカーとして機能している可能性が高い。

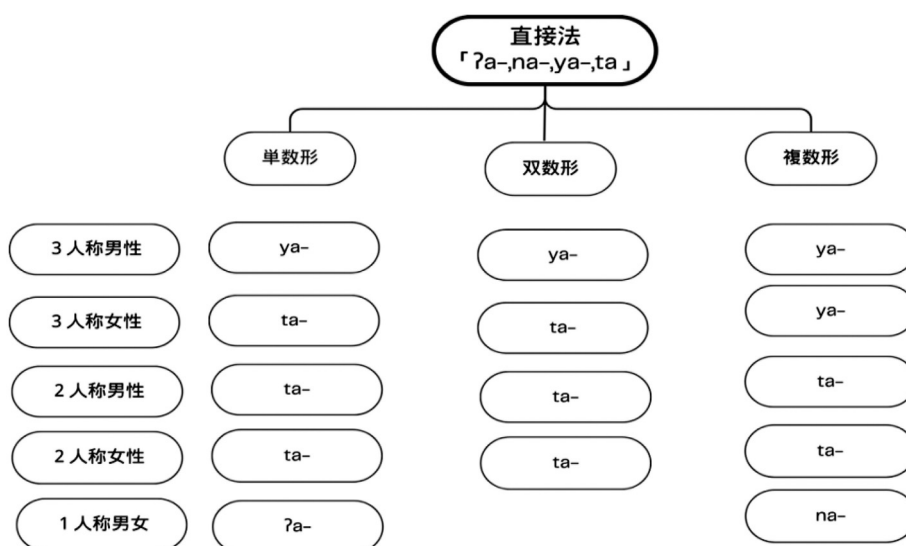
このように、例文 (1) から (5) に示された観察からは、シャーム方言における接辞 $\text{\textcircled{a}m-}$ 、 b- 、およびゼロ形が、文法的・語用論的機能の両面において柔軟に再解釈されていることが明らかになった。とりわけ、これらの接辞がテンス・アスペクトのみならず、モダリティや話者の感情的態度にも関与する点は、従来のフスハー的視点とは異なる動的な構造の存在を示唆している。

5. 先行研究の検討

5.1. 榮谷（1997）

榮谷（1997：105-107）によれば、アラビア語フスハーにおける現在形動詞は、動詞語幹の前に「現在の小辞（ʔaḥruf al-muḍāriʕa: أحرف المضارعة）」と呼ばれる接頭辞、すなわち「ʔa-」、「na-」、「ya-」、「ta-」のいずれかを伴って形成される。これらの接頭辞は、主語の人称・数・性によって使い分けられ、文法的機能を果たしている。具体的には、「ʔa-」と「na-」はそれぞれ1人称単数および複数に対応し、2人称は性や数にかかわらず「ta-」を用いる。

一方、3人称では、男性形に「ya-」が用いられるが、女性形では単数および双数の場合は「ta-」、複数の場合は再び「ya-」が用いられる。さらに榮谷（1997：107）は、欧米の研究者によるアラビア語の動詞活用の記述において、動詞が「完結相」と「非完結相」の二つに大別されている点を指摘する⁴。完結相では人称の区別が接尾辞によって示されるのに対し、非完結相では接頭辞によって人称が示され、さらに数および性を表す接尾辞が付加される場合がある。榮谷は、非完結相の直接法における諸形について、以下の一覧表⁵によって体系的に提示している⁶。



⁴ 先行研究（榮谷，1997；仁一，2009）では、動詞を「完了形」と「未完了形」に分類しているが、本稿では、よりアスペクト（相）の観点からの分析に基づき、これらに対応する用語として「完結相（perfective）」および「非完結相（imperfective）」を用いることとする。

⁵ 榮谷の表をもとにしながら、異なる形式で再構成したものである。

⁶ アラビア語フスハーには多くの接尾辞が存在するが、ここでは説明を複雑にしないために、接頭辞のみに焦点を当てる。

5.2. 仁一 (2009)

仁一 (2009: 72) によれば、アラビア語フスハーにおける非完結相は、まだ完了していない行為、現在も継続中の行為や状態、習慣的な行為、さらには近接未来の出来事を表す形式である。完結相においては主語の人称・数・性を接尾辞によって標示するのに対し、非完結相ではそれらを接頭辞によって表現する点が大きな特徴である。また、非完結相の一形態として位置づけられる接続形 (subjunctive form) は、活用の形態そのものは非完結相と共通しているものの、語尾母音において差異がみられる。接続形は主に、可能性 (能力)、希望、目的、義務を表現する文脈、あるいは未来の否定表現などにおいて使用される。この接続形を伴う代表的な動詞や表現には、以下のようなものが挙げられる。

- ① ʔastaʔāʕa ʔan (～することができる)
- ② ʔarāda ʔan (～したい、～することを望む)
- ③ yadzibu ʔan (～しなければならない、～すべきである)

これらの構文は、話者の意志や義務感、可能性の判断といったモダリティ (話し手の心的態度) を明示する上で重要な機能を果たしている。

5.3. Cowell (1964)

5.3.1. ʕam-⁷ 接辞の意味

Cowell (1964: 320-322) は、ʕam- 接辞は、進行形、一時的状態、反復的な行為という意味で用いられる⁸。通常、この接辞は英語の -ing 形式に翻訳されるが、一部の心理状態動詞やその他の例外があると述べている⁹。

⁷ Cowell (1964: 320) によれば、この語彙素にはいくつかの形態が存在し、最も一般的に用いられるのは ʕam- であるが、ダマスカスでは ʕamma- の形も聞かれ、さらに ʕamm, ʔam-, そして語源とされる完全形 ʕammal などとも使用されることがある。加えて、ʕam- は一人称の主語と共起する際に b- を伴うことがあり、これは b- が非時制接頭辞 (non-tense prefix) ʔa- で始まる動詞によく接続される傾向があるためである。しかしながら、Cowell (1964) は、ʕamma- が動詞と切り離されて単独で使用される場合があること、すなわち接頭辞 ʕam- の語源である ʕammal と同様に独立した語として機能しうる可能性については触れていない。

⁸ 特定の種類の英語の動詞は (Modal Verbs: できる)、実際に起こっていることを示すために通常 -ing 形で用いられる事は無いが、アラビア語の動詞は、適切な場合には他の動詞と同様に ʕam- 接頭辞活用形と共に用いられる。例えば、「māli ʕam-ba-ʔder bakkel aʔʔāt-i (ベルトを締めることができない)」

⁹ 筆者は、先行研究の Cowell の節において、接辞の意味を (1~10) の番号で示している。従って、本研究で新たに提示する例についても、改めて 1 から番号を付して示すことである。

(1) 進行中の行為を表す

- a. [°]l-muʔadden ʕam- yə- ʔadden [°]l- ʔadān
The muezzin¹⁰ IND-3.SG.M- give DEF- call to prayer
「ムエジンが祈りの呼びかけをしている。」

- b. ʔəm-ī ʕam-tə- stanā-nī
mom-my IND-3.SG.F- wait- me
「ママが私を待っている。」(作例)

(2) 一時的状態を表す

- a. ʕam- ʔə- dros taht iʃraf [°]l-professor Lī
IND- 1.SG-study under supervision of DEF-Professor Lee
「私は李先生の指導の下で勉強している。」(作例)

- b. Mustafa ʕam-yə- tʕalm ʔalmmanī
mustafa IND-3SG.M-learn German
「ムスタファはドイツ語を学んでいる。」(作例)

(3) 反復的に起こる行為、または職業として通常行われる行為を表す

- a. kəll marra ʕam- ʔə- dʒī la-ʕind-ō ʕam-yə-kūn mafyūl
Every time IND-1SG-come to-visit- him IND-3SG.M-is busy (these days)
「私が彼のところに行くと、彼はいつも忙しそうにしている。」

- b. ʕam-ʔə- fteyēl muterdʒm -ē li-nes[°]os[°] ʔaflām jaban-yēh
IND-1SG- work translator-SG.F for-text (PL) movie (PL) Japanese (F)
「日本映画の字幕翻訳者として働いている。」(作例)

5.3.2. b- 接辞の意味¹¹

Cowell (1964 : 324-327) によれば、b- 接辞を伴う非完結相は、いくつかの異なる意味領域において用いられるとされる。具体的には、未来 (future) の出来事やアナウンス的用法 (an-

¹⁰ ムアッジン (巫: مُؤَذِّن) は、モスクのミナレット (尖塔^{せんとう}) から一日五回の礼拝 (サラート) ファジュール、ズフル、アスル、マグリブ、イシャールの各礼への呼びかけ (アザーン) を行う人物である。ムアッジンは、ムスリム共同体にとって正確な礼拝時刻を知らせるうえで重要な役割を果たしている。

¹¹ Cowell (1964) は、1 人称複数の現在形動詞で発生する現象に関しては、シャーム方言の話者は b- 接

nouncement), さらには性質的可能性 (potentiality, 英語の can, would, will または形容詞的な傾向) を表す場合, そして「一般的・恒常的な事態」(general/habitual situations) などを表現する用法がある。具体的に, **b-** 接辞を伴う未完了形は, 英語の単純現在形のように, ジェネラリゼーション (generalization) や非時間的なステートメント (時間に縛られていない普遍的な事実) という意味で用いられる¹²。

(4) 未来の出来事を表す

- a. **b- Ø- kūn** ʃand -ak ʃal-ʔaktar baʃd sāʃa
IND-1SG-be place -your at-latest after hour
「遅くとも 1 時間以内には君のところに行くよ。」

- b. **b- Ø- ʃuf-ak** bukra
IND-1SG-see-you tomorrow
「それではまた明日。」(作例)

(5) ポテンシャルな意味を表す

- a. ʔēmta ma kār **b- tə- dfaʃ** -lī
anytime IND-2SG.M-pay -me
「いつでも払ってくれていいよ。」

- b. mā **b- Ø- ʃteyel** maʃ hek nās
not/never IND-1SG-work with/for like this people
「こんな人たちのために働くななんて, 絶対にありえない。」(作例)

(6) 一般的事実・恒常的事態 (非時間的なステートメント) を表す

- a. ʔl- dʒdʒādʒat **b- yə- bīdʕu** bēdʕ
DEF-hens (PL) IND-3PL.F- lay egg (PL)
「雌鶏が卵を産む。」

辞を **m-** 接辞に変化する傾向があると述べていた。特に, 動詞が (**m-**, **b-**, **l-**, **r-**) で始まる場合は, 1 人称複数形の「**-n-**」の同化は任意であるとしている。例えば, 「**-buus** (キスする), **-muut** (死ぬ), **-luum** (責める), **-ruuh** (行く)」という動詞は, 「**me-m-buus** (キスする), **me-m-muut** (死ぬ), **me-l-luum** (責める), **me-r-ruuh** (行く)」のようになる。

¹² “Like the simple present in english, the simple imperfect is used to make generalization and non-temporal statements” (Cowell, 1964: 326).

- b. ʕlī¹³ b- tə- ʕref tə- hkī kurdī
 Ali IND-3SG.F-know(v1) 3SG.F-speak(v2) Kurdish
 「アリはクルド語を話せる。」(作例)

(7) 反復的に、あるいは周期的に、あるいは習慣的に起こる行為、または職業として通常行われる行為¹⁴

- a. b- yə- nām -u ʕ-al-ʔasʔfūh bi-ʔ l-lēl bsabab ʔ l- ʕōb
 IND-3PL-sleep-they on-the- roof at -the-night because of DEF- heat
 「暑いので、夜は屋根の上で寝る。」

- b. Gulistan¹⁵ b- tə- ʕtʔl mʕʕlem-ē bi-madrass ʔabtadayī
 _____ IND-3SG.F-work teacher-(F) in-school elementary
 「グリスタンは小学校の教師として働いている。」(作例)

5.3.3. Ø- ゼロ形の意味

Cowell (1964 : 343-344) によれば、アラビア語の非完結相は、直接法 (indicative)、接続法、假定法 (subjunctive)、および命令法 (imperative) の3つのモードで活用される。

直接法においては、動詞に b-, ʕam-, rah- といった接辞が付加されるのに対し、接続法(假定法)では、これらの接辞が省かれ、「ʔə-, nə-, yə-, tə-」といった非完結形の基本的な人称接辞のみが残る形となる。

(8) ムード的な用法「祈願、示唆、間接的な命令」等を表す

- a. ʔalla Ø- yə- wafʔ -ak¹⁶
 God SUBJ-3SG.M-grant success -you
 「神があなたに成功を授けますように！」 (祈願)

¹³ アラブ諸国では通常『アリ (Ali)』という名前は男性に用いられるが、ここでは女性を指している。

¹⁴ 榮谷 (2002 : 267) 『アラビア語エジプト方言の未完了形の用法』の表現である。

¹⁵ Means “rose garden” in Kurdish and Turkish, ultimately from Persian.

¹⁶ Cowell (1964: 344) では、同じ例文が接辞 b- を用いた形 (ʔalla b-yə-wafʔ-ak :God will grant you success) で示されており、違いは確定的 (assertive) な意味と願望的 (optative) な意味に関連すると説明されている。動詞が Ø- ゼロ形で始まる場合には願望的な意味 (願いや望み) を表すが、b- 接辞を伴う場合には確定的な意味 (事実の陳述) を示す。また、Cowell (1964 : 347) によれば、シャーム方言には、直接法 (indicative) と假定法 (subjunctive) のいずれを用いるかが一義的に定まらず、文法的にどちらも許容されるような曖昧で境界的な用法が存在するという。つまり、文脈や話者の意図、あ

- b. Ø- ʔa- ʕmol ʔahwe, wəlla ʃāy ?
 SUBJ-1SG-make coffee or tea
 「コーヒーを入れようか、それとも紅茶を入れようか？」 (示唆)

- c. Ø- nə- rtah-ʔllna nətfe hōn ?
 SUBJ- 1PL- rest- we a bit here
 「ここで少し休もうか？」 (間接的な命令)

(9) ～かもしれない (yədʒōz/ yə-mkin/ʕal-ʔaylab), ～しなければならない (lāzm) という
 モダリティ表現等の後に続く非完結相の動詞が接続法を表す¹⁷

- a. ʔl-wahed lāzm Ø- yə- hkī ʔl-haʔ mahmān sʕār
 the-one must SUBJ-3SG- tell the-truth no matter happen
 「何が起ころうとも、人は真実を伝えなければならない」(作例)

- b. ʕa-hakī ʔl- dektōr, yəmkīn Ø- ʔə- rdʒaʕ Ø- ʔə- mʃi
 According to DEF- doctor might SUBJ-1SG-come back (v₁) SUBJ-1SG- walk (v₂)
 「医者によれば、自分の足で歩けるようになるかもしれない」(作例)

(10) 命令形の否定形 (lā : don't) や特定の表現の後に続く非完結相の動詞が接続法を表す

- a. lā Ø- tə- ʕmōl maʕakel maʕ-ōn
 not SUBJ-2SG.M-make problem (PL) with-them
 「彼らと問題を起こすな！」(作例)

- b. lā Ø- tə- ʕalī sʕōt- ak ʕal-ʔab- ōk
 not SUBJ-2SG.M-raise voice-your on-dad- your
 「お父さんに向かって声を荒げてはいけない！」(作例)

るいは発話の微妙なニュアンスによって、用いられる法が異なることがあり、必ずしも文法規則によって一方が固定されるわけではないケースがあるという指摘である。

¹⁷ 石橋 (2021:143) のアラビア語カイロ方言の研究で述べられているように、このような用法はシャーム方言にも見られる。

6. 先行研究のまとめと問題点

アラビア語フスハーに関する研究では、榮谷 (1995) および仁一 (2009) が、動詞の接辞 (2a-, na-, ya-, ta-) が直接法 (indicative) および接続法 (subjunctive) のいずれにも共通して用いられ、両者の識別は主に語尾の短母音 (-u: 直接法, -a: 接続法) によって行われる点を指摘している。つまり、フスハーにおいてはムードの識別は接辞ではなく、語末の母音形態に依存する傾向が強い (例文 1 参照)。これに対し、Cowell (1964) によるシャーム方言の分析では、b- や ʕam- などの接辞が直接法を示す形式的指標として機能し、接続法においてはこれらの接辞が付加されない。この構造上の違いは、語尾母音が一般に発音されないシャーム方言において、ムードの識別が主に語頭要素、すなわち接辞の有無によって行われることを示している (例文 2 ～ 5 参照)。Cowell はまた、ʕam- が進行中の動作、一時的な状態、ある条件下における反復的な行為などを表すとし、b- には未来の出来事、習慣的な行為、告知、可能性 (potentiality) といった機能があると述べている。加えて、接辞を伴わないゼロ形も接続法に対応する形式として扱われている。しかしながら、Cowell (1964) はこれらの接辞について、基本的な文法的用法を提示するにとどまり、話者の主観的意図や感情、態度といった語用論的側面との関係については十分に踏み込んでいない。

さらに、シャーム方言における接辞 ʕam-, b-, およびゼロ形の意味的・機能的差異や語用論的展開に関する比較研究は、依然として限定的である。

とりわけ、ʕam- が話者の意識や態度をどのように反映するか、また複合形 ʕam- + b- において b- がどのように再解釈されるかについては、依然として未解明である。そこで本研究では、b- 形とゼロ形の意味的および機能的比較、ʕam- の語用論的機能、ʕam- + b- の複合形式に見られる再分節および再解釈、さらに等位構文における ʕam- とゼロ形の接頭辞の用法に注目し、より詳細な分析を行うことを目的とする。

以上のように、これまでの研究では接辞 ʕam-, b-, およびゼロ形の基本的な機能はある程度明らかにされてきたものの、それらの意味的拡張や語用論的展開、特に話者の意図や文脈との関係性については十分に検討されてきたとはいいがたい。

このような問題意識を踏まえ、本研究では「シャーム方言において、接辞 ʕam-, b-, およびゼロ形はどのように意味的・機能的変化を遂げてきたのか。また、その変化は再分析理論 (Langacker 1977, Eckardt 2006) の枠組みにおいてどのように説明可能か?」の問いを中心に据え、実際の言語使用例をもとに検討を行う。

7. 再分析理論 (Reanalysis) の枠組みと本研究への適用

本節では、言語の表面的な形が変わらないまま、その機能や意味が変化していく「再分析 (reanalysis)」という概念を取り上げ、シャーム方言における接辞 *ʕam-*, *b-*, およびゼロ形 (*ʔO-*, *nO-*, *yO-*, *tO-*) に見られる意味機能の変化を、この枠組みを通してどのように説明できるかを検討する。再分析とは、言語形式の形自体 (音や綴り) が変化しないにもかかわらず、その構造的役割や意味的解釈が変わる過程を指す。

Jarad (2010: 53) は、Langacker (1977: 58) の定義に基づき、再分析を次のように紹介している¹⁸。

“Change in the structure of an expression or class of expressions that does not involve any immediate or intrinsic modification of its surface manifestation.”

「言語形式の表層形に変化が認められないまま、その構造や意味機能が内部的に再解釈されるプロセスである。」

Langacker (1977) は、この現象を次の2つの側面から説明している。

1. 再分節 (Resegmentation)

もともと一つの単位として理解されていた形態素が、別の区切り方で再解釈されることである。

2. 再定式化 (Reformulation)

語の見た目 (形態) は変わらないまま、統語的あるいは意味的な機能が再解釈されることである。

さらに、Eckardt (2006) は、再分析における意味変化のプロセスを次の3つの観点から理論化している。

¹⁸ 本研究では、著者はすでに Langacker および Eckardt の枠組みを、番号付きの例 (1～5) を用いて紹介している。そのため、本稿で議論を継続する新たな例については、(6) 以降の番号を付して示すこととする。

3. 統語構造と意味の再配置

語や形態素の位置づけが変わることで、それに伴って意味解釈も変化することがある。

4. 語用論的推論と意味の定着 (Semanticization)

話者が文脈に応じて一時的に推測した意味が、繰り返されることで形式の一部として定着し、新たな意味として定義されるようになる。

5. 意味変化が構造変化を促す

意味の再解釈は単なる副次的変化ではなく、統語的・形態的構造の変化を引き起こす中心的な要因にもなり得る。

このような理論的背景をもとに、本研究では *ʕam-*, *b-*, ゼロ形に見られる意味や機能の変化を、再分析の一形態として位置づけ、言語使用における具体的な事例を通して考察を進めていく。特に、形式が変化していないにもかかわらず、文脈によって意味や統語的役割が変化する現象に注目し、再分節と再定式化などの観点から詳細な分析を行う。

8. 接辞の意味機能再分析

8.1. *b-* 接辞とゼロ接辞の潜在的. ポテンシャルな意味の比較分析

以上のように、Cowell (1964: 324) は、接辞 *b-* が直説法 (indicative) および接続法 (subjunctive) の両モードにおいて使用されることを「simple imperfective (*b-*) applies to both modes (indicative and subjunctive)」と述べている。また、同書 (p.347) では、「there are borderline cases in which speakers may choose either indicative (*b-*) or subjunctive ($\emptyset$ -)」とし、話者によっては文脈に応じて *b-* あるいはゼロ形 ($\emptyset$ -) を選択する境界的な事例が存在することを指摘している。しかしながら、Cowell の記述は *b-* と $\emptyset$ - の対立を「assertive (直説的)」および「optative (希望的)」という語用論的枠組みに限定しており、接続法的意味を伝える文脈において、話者がいかなる条件下で *b-* の使用を選好するかという点については、体系的な分析が行われていない。

本節では、この点に注目し、接続法的文脈における *b-* 形とゼロ形 ($\emptyset$ -) の使用実態を比較検討する。とりわけ、話者の意図、発話の文脈、談話の機能といった語用論的条件が、形式選択にどのように関与しているかを、以下の用例を通じて説明する。

- (7) *b-* *yə-* *dʒi* *ū-* *b-* *yə-f* *teyel* *maʕ -i*
IND-3SG.M- come and-IND-3SG.M-work with -me
「彼は私と一緒に働くことができる。」

- (8) Ø- yə- dʒi ū- Ø- yə- fteyel maʕ-i
 SUBJ-3SG.M-come and- SUBJ-3SG.M- work with-me
 「彼は私と一緒に働くことができる。」

両文(6～7)において、動詞は「～できる」「～する可能性がある」といった潜在的意味を共有している。しかしながら、意味の相違は命題的内容にあるというよりも、むしろ発話者が用いるポライトネス(丁寧さ/無礼さ)の方略に関係している。すなわち、接頭辞 b- は直説法の指標であると同時に、相手への敬意や丁寧さを表す語用論的機能を担うことがあり、特に発話者が年下で、相手が目上の場合に用いられる傾向がある。

一方、ゼロ形は、より直接的で感情的なニュアンスを持ち、発話者が年上である場合や、相手との距離が近いときに使用されることが多い。このように、両者はともに潜在的な意味を共有しつつも、対人的関係や話し手の態度の違いを反映している点で、語用論的な意味合いが大きく異なると考えられる。この点に関連して、Brustad (2000: 236-238) は、アラビア語における接続法が社会的相互行為における丁寧さを示す手段としてしばしば機能することを指摘している。とりわけシリア(シャーム)方言では、英語の “Would you like to...?” に相当する丁寧な依頼表現において、直説法の接頭辞 b- が一般的に用いられると述べている(例文 11 を参照に)。Brustad によれば、Cowell (1964: 344) はこのような文脈で接続法を用いることによって丁寧さを表そうとしたが(例文 8 を参照に)、その用法はバイルートの話者によって否定されており、彼らはこのような状況では b- の使用こそが自然かつ適切であると主張している。このように、Brustad (2000) は文法記述と母語話者の直感との間に存在する相違を明らかにし、口語アラビア語におけるムードおよびモダリティの語用論における変異と複雑性を浮き彫りにしている。

この問題を考えるにあたり、筆者はシャーム方言の母語話者としての立場から意見を述べた。とくに、Cowell (1964: 344) が丁寧な依頼の表現として接続法(Ø-)を用いている点について、Brustad (2000) が紹介するバイルートの話者が「この形は使われない」と否定していることに対して、筆者は異なる見解を持つ。以下に、自ら作成した用例(例文 8～10)を通じて、Ø- 形が丁寧さや話者の配慮を示す機能を持ちうることを検討する。

- (9) Ø- ʔa- ʕmol ʔahwe, wəlla jāy ? (Cowell, 1964: 344)
 SUBJ-1SG- make coffee or tea
 「コーヒーを入れようか、それとも紅茶を入れようか？」

- (10) Ø- ʔa- ktub muxatʕʕ ʔl- bahes hala wəlla baʕden? (作例)
 SUBJ-1SG- write plan DEF-research now or later
 「今、研究計画書いたほうがいい？それとも後のほうがいい？」

- (11) Ø- ʔə- nzōl Ø- Ø- dʒīb ʔl- ʔradʕ wəlla Ø- Ø- ʔəstana ʔəway?
 SUBJ- 1SG- go SUBJ-1SG-bring DEF-stuff or SUBJ-1SG- wait a little bit
 「荷物取りに行ったほうがいい？それとももうちょっと待ったほうがいい？」（作例）

- (12) b- tə- ʔrab-ī ʔāy ? (Brustad, 2000: 236)
 IND-2SG- drink- 2F tea
 「お茶を飲みませんか？」

- (13) Ø- tə- ʔrab-ī ʔāy ? (作例)
 IND-2SG-drink- 2F tea
 「お茶を飲む？」

例文（8～10）を分析すると、「wəlla（～それとも）」という接続詞が用いられており、これは二つの選択肢の間の可能性や代替を示す機能を果たしていることが分かる。したがって、この例文は敬意の高低を表すことを目的としているのではなく、むしろ聞き手に選択の自由を与えることに重点が置かれている。そのため、動詞の前には Ø- ゼロ形が用いられており、特に一人称（話者）が関わる場合に顕著である。

一方、Brustad の例文（11）を見てみると、そこでは飲み物として「お茶」という一つの選択肢しか提示されておらず、他の種類の飲み物との選択肢は存在しない。そのため、このような状況では接辞 b- の使用が好ましいとされる。実際、例文（12）に見られるように、シャーム方言では Ø- ゼロ形の使用も受け入れられており、特に発話のトーンが低くゆっくりしている場合にその傾向が顕著である。即ち、先行研究の Brustad 2000 では、接辞 b- は丁寧さや形式性と関連づけられているが、シャーム方言のデータは、これらの機能が韻律的および語用的要素によって文脈的に構成されることも示唆している。実際、（13～15）の例に見られるように、Ø- ゼロ形であっても、発話緩和のための表現が添えられることで、丁寧な機能を果たし得る。

- (14) hābeb Ø- tə- hkī ʔī?
 like SUBJ-2SG- say something
 「何か言いたいことがあるでしょうか？」

- (15) ʔik- ī Ø- tə- ssāʔd- ī- nī bi-hamel ʔl-ʔrādʕ?
 could-you.2SG.F SUBJ- 2SG- help- you.2SG.F-me to-carry DEF-luggage(PL)
 「荷物を運ぶのを手伝ってもらえませんか？」

- (16) maʃleʃ Ø- tə- dʒi bi-waʔet tanī?
 would SUBJ- 2SG-come at-time another
 「別の時間に来てもらえますか？」

上述したように、接辞 *b-* は特定の文脈において、Cowell (1964) および Brustad (2000) が指摘するように、接続法 (subjunctive mood) に関連する意味を示すことがある。これは、*b-* がテンスやアスペクトに限定された接辞ではなく、可能性やムード (mood) に関係する意味も表現しうることを示唆している。この点において、*b-* 接辞の機能は Ø- ゼロ形と類似しており、直接法 (indicative) と接続法 (subjunctive) の両方にまたがる働きを有すると考えられる。丁寧さの観点から、Brustad (2000) は *b-* を丁寧表現のマーカーとして位置づけており、本研究の結果もこれを支持している。一般に、*b-* 接辞は丁寧さと結びつく頻度が高いのに対し、Ø- ゼロ形はより親密さや非公式性を帯びやすく、両者は文脈に応じて使い分けられていると考えられる。もっとも、これは Ø- ゼロ形が同様の機能を果たし得ないことを意味するものではない。むしろ、文脈やイントネーションによっては、Ø- ゼロ形も感情的あるいは親密な場面において、丁寧さを示すニュアンスを担いうる。

次節では、Ø- ゼロ形と接辞 *ʃam-* が同一文内に共起する場合に、それらがどのようにテンスやアスペクトの意味を表すかを検討する。

8.2. *ʃam-* 接辞を含む等位構文における Ø- ゼロ形の意味分析

榮谷 (2002: 268) は、エジプト方言におけるゼロ形 (Ø-) の使用について、テンス的用法の一部として言及している。すなわち、「無標の未完了形は、直前の動詞と同じ時制をあらわす。動詞の未完了形が連続した場合に、接頭辞 *bi-* や *ha-* が 2 番目以降の動詞で省略されたもの」と述べている。具体的には、動詞が連続する構文において、2 つ目以降の動詞からは接辞 *bi-*¹⁹ や *ha-* が省略され、その省略された形 (ゼロ形) が先行動詞と同一のテンスを表すと解釈されている。しかしながら、榮谷の記述においては、このゼロ形の機能に関する主張を裏付ける具体的な言語資料や例文が提示されておらず、その用法が文法的・語用論的にどのように働いているかについては、詳細な分析は行われていない。

一方、Cowell (1964: 320) は、シャーム方言において、*b-* 接辞が付いた動詞が等位接続構文で連続する場合、一般的に両方の動詞に *b-* が付加されると指摘している。これに対して、*ʃam-* や *ha-* のようなテンス・アスペクトを表す接辞は、構文上、しばしば最初の動詞のみに現れ、後続の動詞では省略される傾向がある。ただし、この分析においても、ゼロ形 (Ø-) のテンス・アスペクト的機能についての明示的な説明はなされていない。

¹⁹ エジプト方言では *b-* に短母音 (i) が付加された形である。

本稿では、榮谷 (2002) の分析枠組みを参考にしつつ、それをシャーム方言に応用し、**ʕam-** 接辞とゼロ形 (**Ø-**) の相互関係に注目する。筆者自身が収集した言語データをもとに、ゼロ形の機能について改めて検討を行う。まず、フスハーとシャーム方言における等位接続構文の動詞接辞の使用を比較し、それぞれの構文において動詞の接辞がどのように用いられているかを確認する。

- (17) (ʔinna-hu) **Ø-** **ya- drus- u** wa- **Ø- ya- ʕmal- u** (フスハー)
 Indeed-he.3SG.M ___-3SG.M-study-IND and ___-3SG.M-work-IND
 「彼は勉強していて、働いている。」 (一時的な状態)

- (18) **b-** **yə-** **drus** **ū-** **b-** **yə-** **ʕteyel**
 IND- 3SG.M-study and-IND-3SG.M-work
 「彼は勉強もしながら、働くこともできる。」 (ムード的な用法)

- (19) **ʕam- yə-** **drus** **ū-** **Ø- yə-** **ʕteyel**
 IND-3SG.M-study and-SUBJ-3SG.M-work
 「彼は勉強していて、働いている。」 (一時的な状態)

- (20) **ʕam-yə-drus** **ū-** **ʕam- yə-** **ʕteyel**
 IND-3SG.M-study and-IND-3SG.M-work
 「彼は勉強していて、働いている！」 (一時的な状態)

- (21) **Ø-** **yə-** **drus** **ū-** **Ø-** **yə-** **ʕteyel**
 SUBJ-3SG.M-study and-SUBJ-3SG.M-work
 「彼は勉強もしながら、働くこともできる。」 (ムード的な用法)

フスハーとシャーム方言における等位接続構文を比較すると、フスハーの例文 (16) では、1 番目の動詞および 2 番目の動詞の両方に現在形の標識となる接辞 **ya-** が付加されている。また、動詞語尾に現れる短母音 **-u** は、直説法 (indicative mood) を明示する機能を果たしている。これは、**ya-** がフスハーにおいて直説法と接続法 (subjunctive mood) の両方で用いられるため、語尾母音によってムードの区別が形態的に示されていることを意味する。さらに、この例文では等位接続詞として **wa-** が用いられ、文頭には強調表現 **ʔinna** が配置されており、文全体の内容に焦点を当てる役割を担っている。

一方、シャーム方言の例文 (17) では、等位構文内で 1 番目の動詞および 2 番目の動詞の両

方に **b-** 接頭辞が付加されている点が特徴的である。この **b-** 接辞は、ゼロ形 ($\emptyset$ -) と意味的に近い潜在性 (ポテンシャル) を示すが、より丁寧で控えめな表現として機能していると解釈できる (8.1. 節を参照に)。加えて、接続詞もフスハーの **wa-** に代わって **ū-** が用いられており、これは両変種間における統語的・語彙的差異の一端を示すものといえる。例文 (18) では、**ʕam-** 接辞が1番目の動詞のみに付加されており、2番目の動詞は頭辞を持たないゼロ形 ($\emptyset$ -) で現れている。このような場合、1番目の動詞に **ʕam-** がすでに付加されているという条件の下でのみ、2番目の動詞のゼロ形がテンス・アスペクト的な意味を継続的に担うことが可能になる (榮谷, 2002: 268 の説明を参照に)。

一方、例文 (19) では、**ʕam-** が1番目の動詞と2番目の動詞の両方に付加されている。この場合、2番目の動詞に現れる **ʕam-** は、テンス・アスペクトを明示するというよりも、動作そのものを強調する機能を持つと解釈できる。すなわち、2番目の動詞の **ʕam-** は、フスハーにおける **ʔinna-** のように、文中の要素を強調する役割を果たしていると考えられる。さらに、例文 (20) では、**b-** や **ʕam-** といったテンス・アスペクトの接辞が一切付されておらず、等位接続構文全体が叙想的 (モーダル) な解釈を導く構造となっている。このような場合、発話は現実の出来事の描写というよりも、聞き手に対する「提案」「助言」「可能性の提示」といった語用論的意味を帯びることが多い。

以上のような等位接続構文に関する観察を踏まえた上で、本節の主題であるシャーム方言における接辞 **ʕam-** の語用論的機能、ならびにゼロ形 ($\emptyset$ -) のテンス・アスペクト的解釈に再び焦点を当てて検討を進めることとする。以下の例文 (21~23) をもとに、さらなる分析を試みたい。

- (22) **ʕam-ʔə-tʃaʃā** **ū- $\emptyset$ - $\emptyset$ - nām** bakīr
 IND-1SG-eat dinner and-SUBJ-1SG-sleep early
 「私は夕食を食べて、早く寝る。」

- (23) **ʕam-yə-tʃlāʃ** **ū- $\emptyset$ - yə- fōt** ʕa-fakef-ō
 IND-3SG.M-exit and-SUBJ-3SG.M-enter as-want-he
 「彼は好きなように出入りする。」

- (24) **ʕam- tə- kōl** **ū- $\emptyset$ - tə- frāb** **ū- $\emptyset$ - tə- nām**
 IND-2SG.M-eat and-SUBJ-2SG.M-drink and-SUBJ-2SG.M-sleep
 「あなたはただ食べて、飲んで、寝ているだけの生活だ。」

上記の例文 (21~23) は、1番目の動詞に接辞 **ʕam-** が付加され、その後に接続詞 **ū-** を通じて

導かれる動詞がゼロ形で現れるという、動詞の等位接続構造の一例を示している。

このような構文において、テンス・アスペクトの解釈は1番目の動詞によって統括される。後続するゼロ形の動詞は、その意味の特徴を継承する。したがって、ゼロ形は単なる主語一致の形式にとどまらない。それは、等位接続を通じて先行動詞とテンス・アスペクトを共有する機能も果たしていると考えられる。

さらに、例文(23)では三つの動詞の連続が確認され、1番目の動詞「ʕam-tə-kōl」のみがʕam-によってアスペクト的にマークされており、2番目・3番目の動詞は接続詞ū-の後にゼロ形で現れている。この構造は、先行する動詞のアスペクト的意味が後続の複数の動詞に拡張されることを明確に示している。

しかしながら、話し手が怒っている場合や不満を抱いている場合、あるいは驚きや困惑といった感情を伴いながら直前に得た情報に反応しているような語用論的文脈では、後続の動詞においてもʕam-が繰り返される場合がある。このような場合、繰り返されたʕam-は文法的な時制・アスペクトの標示としてではなく、話し手の感情や態度を強調する語用的要素として機能していると考えられる。

以下の例文(24~25)は、まさにこのような用法を示している。ここでは、接辞ʕam-の異形(allomorphy)であるʕamma-が使用されており、語用的強調の観点から見ると、ʕamma-のほうがより適切な形式であると考えられる。

- (25) a. ʕamma-yə-bkī ū-ʕamma- yə- sʕarex men dōn sabab!
IND-3SG.M-cry and-IND-3SG.M-scream for no reason
「彼は理由もなく泣いたり叫んだりする。」

- b. ʕamma-yə-bkī ū- Ø- yə- sʕarex men dōn sabab!
IND-3SG.M-cry and-SUBJ-3SG.M-scream for no reason
「彼は理由もなく泣いたり叫んだりする。」

- (26) a. ʕamma- yə- dʕrb-ek ū-ʕamma- yə- sseb- ek kamān?!
IND- 3SG.M-hit- you.2SG.F and-IND-3SG.M-bad mouth-you.2SG.F even
「彼はあなたを叩いたり、悪口まで言う！」

- b. ʕamma- yə- dʕrb-ek ū- Ø- yə- sseb- ek kamān?!
IND- 3SG.M-hit- you.2SG.F and-SUBJ- 3SG.M-bad mouth-you.2SG.F even
「彼はあなたを叩いたり、悪口まで言う！」

例文(24 a.)および(25 a.)では、接辞 $\zeta am-$ が1番目の動詞と2番目の動詞の両方に現れている。一方、(24 b.)および(25 b.)では、2番目の動詞の直前においてその接辞が省略されている。この省略は文法的に必須ではなく、形態論的には選択可能であるが、文の意味内容や話者の態度に微妙な影響を及ぼしていることが観察される。たとえば、(24)の「叫ぶ」や(25)の「悪口を言う」といった動作において $\zeta am-$ が省略されると、話者がその行動をすでに慣れ親しんでいる、あるいは日常的な行為として受け取っている可能性が高い。このことは、当該行動が話者にとって新たな情報ではなく、既知の事実や当然の出来事として処理されていることを示している。

言い換えれば、 $\zeta am-$ の繰り返しと省略の有無には、話者の談話的態度や、情報の新規性に対する認識が反映されている。行動を「新しい出来事」として強調したい場合には接辞が繰り返されやすく、逆にそれを「慣習的・既知のパターン」として扱いたい場合には省略される傾向があるといえる。

なお、次節では、接辞 $\zeta am-$ と $b-$ が無中断で連続して共起する構文について、その形式的特徴および意味解釈を中心に考察する。

8.3. $\zeta am-b-$ の共起構造と人称標示機能

シャーム方言においては、動詞の前に現れる接辞が、文脈に応じて再分析され、本来の機能とは異なる新たな文法的・語用論的機能を担うようになる事例が観察される。その顕著な例として挙げられるのが、一人称単数文脈における「 $\zeta am-b-$ 」の複合構造である。

本来、 $\zeta am-$ は進行相や一時的状態を示すアスペクト接辞であり、 $b-$ は未来・習慣・可能性といった時制・アスペクト・モダリティに関連した接辞として分析されてきた。

しかしながら、一人称単数における $\zeta am-b-$ の共起においては、 $b-$ が本来の機能を離れ、「一人称単数(1SG)」の主語標示要素として機能していると解釈される用法が見られる。実際に Cowell (1964: 320) は、「ダマスカス方言では、 $\zeta am-$ に続いて $b-$ が付加される形は一人称単数で最も一般的であり、他の人称では $b-$ を伴わない形がより多く観察される」と述べている。この観察から、 $\zeta am-b-$ という形態は一人称単数において、接辞 $b-$ が主語人称標示的な機能を担うよう再分析されている可能性が示唆される。さらに、母語話者の直感的判断によれば、この $b-$ には単なる人称標示機能にとどまらず、丁寧さや控えめな態度といった語用論的意味が含まれているとされる。つまり、 $\zeta am-$ に続いて $b-$ を用いることで、発話全体に柔らかさや謙譲的なニュアンスが加わることがあり、特に聞き手への配慮を含んだ発話スタイルとして機能している可能性がある。

第8.1節において述べたように、シャーム方言における $b-$ 接頭辞は、文脈によっては丁寧表現のマーカーとして機能することがあり、 $\zeta am-b-$ の構造はこの語用論的機能を一層際立たせるものと考えられる。とりわけ、一人称単数文脈においてこの形が現れる場合、話者の謙遜や

敬意といった態度が形式的に表現されていると解釈することが可能である。

以下に提示する例文をもとに、この構造が持つ文法的・語用論的機能の詳細を検討する。

- (27) **ʕam-b- Ø- drus** luyat əl-ʔinō
 IND-IND-1SG-study language DEF-Aino
 「私はアイヌ語を勉強している。」
- (28) **ʕam-b- Ø- fteyel** dawām dzizʔi
 IND-IND-1SG-work time (job) part
 「私はアルバイトをしている。」
- (29) **ʕam-b- Ø-ʔrā** kitāb ʕan hayāt Steve Jobs
 IND-IND-1SG-read book about life _____
 「私はスティーブ・ジョブズの人生についての本を読んでいる。」
- (30) əl-ʔustāz sato **ʕam-b- yə- dres** bi-ʔislōb sales
 DEF-professor Sato IND-IND-3SG.M-teach with-style easy/clear
 「佐藤先生は分かりやすい方法で教えている。」
- (31) dzāmiʕat hokkaido **ʕam-b- tə- hāreb** əl-tanamur
 University (F) _____ IND-IND-3SG.F-fight DEF-bullying
 「北海道大学はいじめと戦っている。」

例文 (26～28) においては、話者が自身に関連する行為や状態について述べる際に、「ʕam- + b-」という構造を用いることで、発話に謙虚さや柔らかさを加えている様子が観察される。この b- は形式的には省略可能であり、代わりに標準的な一人称接頭辞である ʔə- を用いることもできるが、その場合、語調はやや強く、断定的な印象を与える傾向がある。

これに対し、ʕam- の直後に b- を配置することで、発話はより控えめで丁寧な印象となる。一方、例文 (29) および (30) では、「ʕam- + b- + 人称接辞 (2・3 人称)」という構造が用いられており、この場合には b- が話し手から他者、または共同体に向けられる敬意の表示として機能している。また、ʕam- 自体はアスペクト的な意味に加え、強調を表す談話的要素 (emphatic particle) として再分析されており、人物・集団・物事に対する断定的発話の文脈において、その効果が特に顕著に現れる。

さらに、1 人称複数における「ʕam- + b-」の共起は、音韻的な制約により使用頻度が低いとさ

れる。これは、b-に続く1人称複数の接辞 -na- の連続が、音韻的に処理しにくいとされるためである。しかしながら、b-が発音上 m- (鼻音) へと変化する場合、この音韻的障壁は軽減され、結果として「 $\zeta am- + b- + -na-$ 」という構造が使用されることもある。

この点について、Cowell (1964: 320) は、シャーム方言における1人称複数の現在形動詞において、接頭辞 b- が m- に交替する現象を指摘している。この現象は、音韻的調和 (phonological harmony) や発話の容易さに基づく調整であると考えられ、接頭辞の形態変化と語用論的・談話的機能との関係を考察する上で重要な示唆を与える。

本章で取り上げた b-, $\zeta am-$, ゼロ形の用法は、いずれも再分析理論の観点から、形式的な変化を伴うことなく、その意味機能が拡張・変容していると解釈できる現象である。

9. 考察 (再分析理論による接辞の意味機能変化の解釈)

本研究で取り上げた b-, $\zeta am-$, ゼロ形 (Ø-) の諸用法は、いずれも表層的な形態変化を伴わずに、意味や統語的機能が変化した事例であり、再分析 (reanalysis) の枠組みにおいて説明可能である。再分析とは、言語形式が見た目には変わらないまま、その構造や機能が内部的に変化する現象である (Langacker 1977, Eckardt 2006)。

この理論に基づき、以下の4つの観察事項を再分析の具体例として解釈できる。

A. b- のモダリティ的再解釈 (8.1. 節)

本来、b- はテンスやアスペクトを表す接辞であったが、文脈によっては「可能性」や「話者の判断」を示す機能を持つようになっている (Cowell 1964)。このような意味の拡張は、語用論的推論が形式の固定的意味として定着するプロセス (semanticization) と一致し、Eckardt (2006) の理論に沿う。また、ゼロ形との意味的な重複が見られる点は、Langacker (1977) が述べた「再定式化 (reformulation)」の一例といえる。

B. ゼロ形の構文内での意味拡張 (8.2. 節)

等位接続構文において、先行動詞に付加された $\zeta am-$ がテンス・アスペクトを標示し、後続動詞がゼロ形で出現する場合、このゼロ形は文脈的に先行動詞の情報を引き継ぐ機能を果たしている。つまり、ゼロ形が主語一致のみならず、統語的に時制・アスペクトを担う役割へと再解釈されている。これは構文的役割の再分析として、Langacker および Eckardt の両理論に整合する。

C. $\zeta am-$ のディスコース的転用 (8.2. 節)

$\zeta am-$ は元々、進行相を示す接辞だが、文脈によっては強調マーカーとして再解釈される場合

がある。とくに話者が断定的に述べたい情報を提示する際に、 $\varsigma am-$ が談話的な機能を持つ。このような用法の変化は、語用論的意味の繰り返し使用による定着（語用論的文法化）として説明可能である（Eckardt 2006）。

D. $\varsigma am-$ + $b-$ 複合形の再分節と機能分化（8.3. 節）

$\varsigma am-$ に続く $b-$ が、特に一人称単数文脈において、主語マーカー（1.SG）として再解釈される現象が確認される。この場合、 $b-$ はもはやテンス・アスペクトのマーカーではなく、人称標示へと機能が移行している。さらに、 $\varsigma am-$ は主観的な評価や丁寧さの含意を帯びたマーカーとして再機能化される場合があり、この複合構造は再分節（resegmentation）と再定式化（reformulation）の両プロセスを同時に含む、再分析の典型例といえる。

このように、 $b-$ 、 $\varsigma am-$ 、ゼロ形はいずれも、再分析理論（Langacker 1977, Eckardt 2006）に基づいて、文法的機能や語用的意味の再構成として説明可能である。シャーム方言のこれらの接辞は、単なる形態のマーカーにとどまらず、話者の意図や文脈的要請に応じて柔軟に機能する言語形式へと進化してきたと考えられる。

以上の議論を視覚的に整理すると、以下の図2のようにまとめることができる。

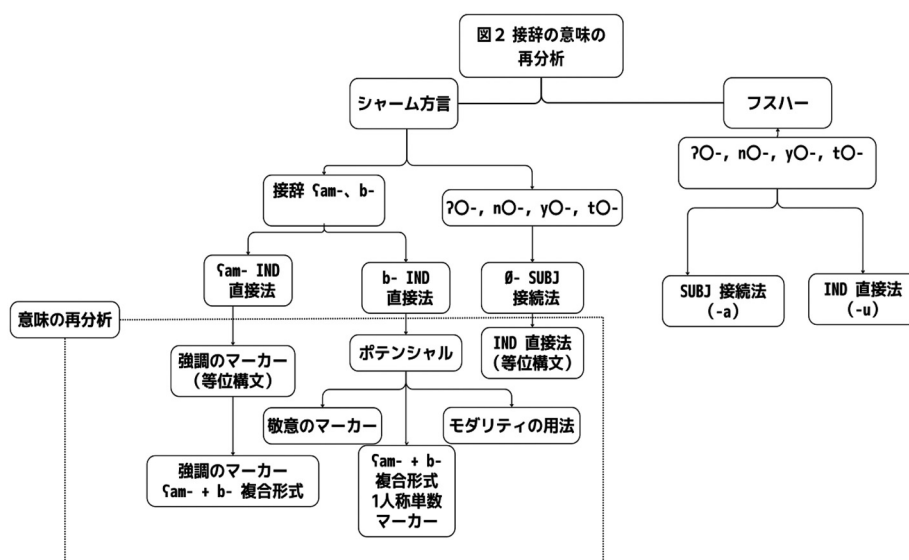


図2 $\varsigma am-$ ・ $b-$ ・ $\emptyset$ - 接辞の意味の再分析

10. おわりに

本研究は、シャーム方言における接辞 $\varsigma am-$ 、 $b-$ 、およびゼロ形（ $\emptyset O-$ 、 $nO-$ 、 $yO-$ 、 $tO-$ ）の意味と機能の変化を、Langacker（1977）および Eckardt（2006）の再分析理論の枠組みに基づい

て検討したものである。とくに、各接辞がもつプロトタイプの（中心的）な意味から、文脈に応じて生じる周位的・派生的な用法への展開に注目し、形態と機能の再構成のプロセスを明らかにした。

従来、ゼロ形は単なる無標の接続法的形式として扱われてきたが、本研究では、 $\S am-$ を伴う等位接続構文において、ゼロ形が先行動詞のテンス・アスペクトを継承する構造が観察され、そこには形式的無標とは異なる、明確な文法的意味が帯びていることを示した。

また、 $\S am-$ や $b-$ は、単なるテンス・アスペクト標示を超え、話者の感情・評価・丁寧さといった語用論的な意味を帯びようになるなど、文脈依存的な意味の拡張が進んでいることも確認された。これらの変化は一見些細でありながら、再分析（reanalysis）という視点から見れば、文法形式が談話と密接に結びついて変化していく動的な過程であり、言語使用の中で語彙・文法・語用論がどのように連動していくかを示す好例である。

本研究を通じて、シャーム方言における接辞の再解釈と機能転換の実態が明らかになり、方言文法の記述だけでなく、言語変化における談話的要因の重要性が示唆された。今後は、より多様な話者や談話状況を対象とした分析を通じて、こうした再分析的現象がどのように自然会話の中で定着し、進化しているのかを追究していくことが課題となろう。

（あり ねすりん・言語科学研究室）

参考文献

- ・ Brustad, K. E. (2000). *The Syntax of Spoken Arabic: A Comparative Study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti Dialects*. Georgetown University Press.
- ・ Cowell, Mark W. (1964). *A Reference Grammar of Syrian Arabic with Audio CD: (Based on the Dialect of Damascus)*. Georgetown University Press.
- ・ Eckardt, R. (2006). *Meaning change in grammaticalization: An enquiry into semantic reanalysis*. Oxford: Oxford University Press
- ・ Hetzron, R. (Ed.). (1997). *The Semitic Languages*. Routledge. (Routledge Language Family Descriptions)
- ・ Huehnergard, J., & Pat-El, N. (2019). *The Semitic Languages* (2nd ed.). Routledge.
- ・ Jarad, N. I. (2010). On the relationship between grammaticalization and reanalysis. *Studia Anglica Posnaniensia*, 46(1), 51-70.
- ・ Niitsuma, Jinichi (新妻仁一) (2009) 『アラビア語文法ハンドブック』白水社.
- ・ Sakaedani, Haruko (榮谷温子) (1997) 「活用語尾か代名詞か—アラビア語の接続代名詞をめぐる—」『言語・地域文化研究』第3号, pp.103-119.
- ・ _____ (2002) 「アラビア語エジプト方言の未完了形の用法」『アジア・アフリカ言語文化研究』第63号, pp.265-301.